

相手を受け入れる心

小 六

「みんなちがって みんないい」

これは、私の大好きな言葉のひとつで、金子みすずさんの「わたしと小鳥とすずと」の詩の一部分である。私の姉は、おなかが人より大きい。生まれるときから腸がむくんでいて、中学生になった今も、毎月一回、点てきをするために病院に通い続けている。姉の小さいころの写真を見ると、おなかがパンパンにふくらんでいて、逆に、手足はかなり細い。今にもたおれそうに見える。このころのことを母に聞くと、母はなつかしそうに、悲しそうに、話してくれた。

「お姉ちゃんね、にん婦さんみたいな体だったから、服はワンピースしか着られなかったんだ。あとね、栄養が足りないから手足が細くてね。体の重心がとれないのか、よく転んでいたわ。」

私には、姉の小さいころの記おくが全くと言っていいほどない。母の話にはおどろいたし、家族で自分だけ、そのことを知らなかったことに、なんだかさびしい思いがした。おなかが大きいかさびしい理由で、母は周りの人からジロジロ見られるのを気にして、プールや海には行かないようにしていたそう。家族で温泉に行っても、誰にも会わなそうな時間にこっそり入浴して、言いたらしい。私は、この話を聞いて、言葉にできない複雑な気持ちになった。姉には、もう一つ、大きな特ちょう

がある。みんなと同じ食事ができないことだ。病気のせいで、脂質をとることができない。学校の給食ももちろん食べられないので、母が作ったお弁当を持参している。母は、姉が少しでもみんなと同じ給食を食べている感じに思えるようにと、学校の献立表を見て、同じように作っている。外食もほとんどできない。お店で売っているハンバーガーやドーナツも食べられない。おやつも、ポテトチップスやチョコレートは食べられない。脂質のほとんどないアメやグミ、ようかんやしょうゆのせんべいなど、限られたものしか食べられない。その大変さは、私もいつも近くで見ているので知っているが、姉はすぐがまんをしている。本当はみんなが食べているものをたくさん食べたいのに、食べたらおなか痛くなつて、病院に行かないといけなくなるから、食べたい気持ちをおさえたい。私は、姉ががまんしている姿を見ると、「たまには、私が姉と代わってあげられたらいいのに。」と思う。

そんな姉も、大きく体調をくずすことなく、無事に中学に入学した。大半の同級生が姉の病気を知らない。おなかは、小さいころの写真ほど大きくはないが、それでも、ウエストのくびれはなく、大きく見える。制服のスカートも、むねのすぐ下ではかないと、下に落ちてしまう。母が一番気にしていたことは、お弁当を持っていくことで、姉がいじめられたりしないかということだった。母は、姉が入学して一カ月経つても、毎日姉に

「誰かにお弁当のこと、何か言われな
い。」

と聞いている。母は、いつも姉を心配
している。私は、姉と二人でお風呂に
入ったとき、姉に聞いてみた。

「ホントにお弁当、何も言われな
い。」

「言われな
いよ。先生がみんなに、私
は病気だから給食が食べられないっ
て話してくれたし。いじめてくる子
もいないし、冷たい目で見てくる子
もいないよ。」

私は、母に言えない姉の気持ちがあ
るかもと思って聞いてみたが、姉は明
るく私に答えてくれた。お弁当で大変
なのは、お弁当を持っていくのを忘れ
られないこと、おかわりができないこ
と、荷物が増えることだけだと、姉は
笑いながら、私に教えてくれた。

姉が、自分の見た目や持ちようを気に
していないのは、周りにいる人たちのお
かげだと思った。先生や友達に恵まれて
いる。姉のことを理解してくれているし、
たぶん、温かく接してくれているのだ
と思う。人は、全く同じ人なんていな
い。見た目も性格も、みんなそれぞれ
ちがうのは、当たり前である。背が高
い人や低い人、発表をするのが得意な
人や苦手な人、運動するのが得意な人
や苦手な人、いろいろな人がいる。自分
とちがうから受け入れられないのではなく、
ちがうことは当然のことなんだと、み
んなが受け入れられる心があったら、
私の姉のように、明るく楽しくみんな
といられるのだと思う。「みんなちがつ
てみんないい」という言葉を、私は
これからも大切にしていきたいと思う。